

親鸞仏教センター通信

2008.
March

2008年3月1日発行

発行者 本多 弘之

編集・発行 親鸞仏教センター(真宗大谷派)

〒113-0023 東京都文京区向丘 1-13-7

TEL. 03-3814-4900 FAX. 03-3814-4901

e-mail shinran-bc@tomo-net.or.jp

ホームページ <http://shinran-bc.tomo-net.or.jp>

第25号

癒しから救いへ

親鸞仏教センター所長 本 多 弘 之

近代生活がそろそろ方向転換の時を迎えているといわれている。豊かさや便利さを追いかけて、ただ進歩発展するのが人間の歴史だという思想が、近代を引っ張ってきたのだが、ここに来てさまざまな行き詰まりの現象が出始めて、これが単なる一時的な事態ではなく、時代の転機だといわれるのである。

苦悩の状況からのあえぎのように、「癒し」を求める現象が、スピリチュアル・ブームとして騒がれている。新自由主義の指標とされる「自己責任」論理の横暴さが、実は自己より大きな社会的な責任による困難な事情を押し隠し、大事な情報を知らせずに、結果の責任のみを個人に押しつけている。その苦境の事実にあえぐわれら一般市民は、努力しながらも苦悩の事態を処理することができずに、せめてもの精神的な解放感を求めて「癒し」に走るほかないのではなかろうか。その癒しを「スピリチュアル」というカタカナで表示するから、精神の深みの問いが、軽薄な商業主義のまやかしに巻き込まれてしまっているように思われる。

実は「スピリチュアリティ」は、人間が自己自身の存在の根拠を求める大事な言葉だったのではないか。たしかにカタカナで表示すると、なにか神秘的なあちら側からの作用に関係する雰囲気になっているかもしれないが、それはこの言葉が西欧の精神に起源をもっていて、絶対者からの関わりのなかにあるからである。

この地球上にたまたま生命が存在し、そのなかに人間も生存を与えられる。それは無限なる条件のなかに、不思議な因縁の恵みによって、たった一度の生命存在として、ここにわれらが生きているということなのである。それは、いつでも消えゆく不安感や他との関わりの不安定さに、自己の存在の弱さを感知せざるをえないということであろう。この弱さと不安とに^{もよお}催されて、存在の大地といわれるような生存の岩盤を求めるところが、宗教的な救いを求める要求なのではなかろうか。その要求によって^{であ}出遇う精神を、「救いとしてのスピリチュアリティ（霊性的自覚）」と表現してみたいと思う。

親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」⑤

光顔巍巍—出世本懐の証明—

親鸞仏教センター所長 本 多 弘 之



本多弘之 所長

連続講座「親鸞思想の解明」の第11回と第12回が、東京国際フォーラム（有楽町）で行われた。第11回では「五徳瑞現—〈世〉に立つことの意義」について、第12回では「〈自在〉—ということの意味」について、センター所長・本多弘之が問題提起を行い、参加者の方々との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、先に行われた第10回からその一部を紹介する。（研究員 羽塚高照）

■ 救われ難き存在

『無量寿経』（『大無量寿経』）の序分で、対告衆である諸菩薩が広く大きな功德をもった存在として説き示され、最後に、一切の衆生が対告衆の視野に入ってきて、その段が終えられます。つまり、ここでは、お釈迦さまが教えを説くときの視野が、目の前で教えの言葉を聞いている存在だけではなく、それを遙かに超えて、時間的にも空間的にも広がって、あらゆる世界の衆生に響くような真理を語ろうとされることが示されているのだらうと思います。

そして、いよいよ教えを説き始めようとするお釈迦さまは、全身が喜び出し、姿色は清浄であり、「光顔巍巍」（『真宗聖典』東本願寺出版部、6頁。以下、『聖典』と略称）として、つまり、「お顔全体が大きな光となっている」と表現されています。すなわち、阿難はお釈迦さまが何かを説こうとしていることを感じて立ち上がり、「今日、世尊、諸根悦予し姿色清浄にして、光顔巍巍とまします」（『聖典』7頁）

と申し上げるわけです。阿難は、釈尊の従兄弟で、ほぼ同じ歳に生まれて、お釈迦さまの一番身近に、いつも付き従って教えを聞いていたと伝えられます。それで、お釈迦さまが亡くなった後、教えを記録しようとなったときには、記憶力が抜群であった阿難の言葉が依り処になった、と伝えられています。しかし、そのぐらい身近にいたにも関わらず、お釈迦さまは「あなたは必ず仏に成る」という「授記」を、阿難にはなされなかったと言われます。

どうも、阿難という方は、慈悲心があるというか情にもろいというか、そういうお方であつたらしいのですが、出家して修行する者にとって、日常性の方向に眼を向けたり、感情をもったりすることは、世俗に戻ってしまうことですから、それを断ち切って修行しなくてはならない。出家主義の教えでは、そう教えるわけですが、ところが阿難は、どうしてもそうはなれない。お釈迦さまは、阿難がそのような出家の道では仏に成れないということを見抜かれて、授記をなさらなかったのだらうと思います。阿難はお釈迦さまの一番身近にいた。しかし、仏法の真理性に触れることができなかった。そういう存在が、この『無量寿経』の対告衆であり、教えを聞いていたということが、非常に大事な意味をもっている、と親鸞聖人は着目したわけでしょう。

■ 出世本懐の証明

日本に伝わってきた仏教の学びとしては、

『涅槃経』や『華嚴経』が一番大事な經典とされていたところに、親鸞聖人は『無量寿経』こそ「大経」である、仏陀の願いが本当に実現している經典である、と見られたわけです。衆生は小さい。しかし、仏陀の願いは、あらゆる衆生を包んで、真理を呼びかけていこうとする大いなる用^{はたら}きです。その『無量寿経』の会座^{えざ}に立った釈尊は、阿難の前に、光り輝くお姿で立ち上げられた。ここから親鸞聖人は、お釈迦さまがこの世に現れた本当の意味は、この經典（『無量寿経』）を説くためであったのだ、と見られたわけです。全身が光り輝いたということは、それこそが「出世本懷」であり、この世に生まれた意味を初めて発見した喜びを象徴しているのが「光顔巍巍」であると。

こういう意味で、親鸞聖人は『教行信証』『教巻』で、『無量寿経』のこの箇所を引かれる直前に、「何をもってか、出世の大事なりと知ることを得るとならば」（『聖典』152頁）という言葉添えておられるわけです。その『無量寿経』が教える本願の真実は、「ひとえに親鸞一人がためなりけり」（『歎異抄』『聖典』640頁）である。こういう感動が、この「光顔巍巍」こそが出世本懷の証明だ、と感じさせたのでしょう。

さらに阿難は、「今日^{こんにち}、世尊^{きそく}、奇特の法に住したまえり」（『聖典』7頁）と、以下、「今日」を4回繰り返しながら、「世雄^{せおう}」「世眼^{せげん}」「世英^{せいよう}」「天尊^{てんそん}」と言葉を変えながら、お釈迦さまの徳を讃めていきます。阿難が、いま、ここに、光り輝いているお姿に出遇っている事実において讃めているわけです。

いま、本願の教えとして、存在の真理を一切衆生に分ち与える方法が見いだせた、そういう直感が内に響いたお釈迦さまには、いわゆる「努力主義」や「自力主義」ではないかたちで真理を感じ取っていける道が開ける、そういう新しい教えの説き方が見えてきた。それを、い

ま説かんとするお釈迦さまが、喜びにあふれて立ち上げられた。お釈迦さまの中に本願が動き出して、本願が、いま言葉になってあふれ出ようとする力、それが「光顔巍巍」、あるいは「奇特の法」として阿難の眼に映っているということではないかと思います。

本当の意味で、十方群生海を平等に仏にしようの大地が開かれた。一切の衆生が、平等に仏地をいただくことができる。こういう視野が、お釈迦さまが本願を説こうというところに、ふつふつと沸いてきて、そのことがお釈迦さまの姿を輝かせているのです。（文責：親鸞仏教センター）

公開講座「親鸞思想の解明」のご案内

本講座は公開（無料）で開催しています。

記

日時：2008年3月25日（水）午後6時30分～9時

4月 休 会

5月 7日（水）午後6時30分～9時

場所：有楽町・「東京国際フォーラム」Gブロック

JR、地下鉄ともに「有楽町」駅より徒歩1分

テキスト：『真宗聖典』大 ¥3,500、小 ¥3,000

ご希望の方は、下記（京都・東本願寺出版部）まで。

TEL 075-371-9189 FAX 075-371-9211

<https://books.higashihonganji.jp>

本多弘之所長の講演録

「親鸞思想の解明」が本になりました

本欄でも取り上げてきた「親鸞思想の解明」（全47回分：2001年11月から2006年8月までの講演記録）が、3巻本として樹心社から出版されました。

発行書籍 四六判上製

第1巻『浄土 その解体と再構築』（320頁）

（序文：文芸評論家 吉本隆明氏）

第2巻『浄土 その響きと言葉』（256頁）

（序文：社会評論家 芹沢俊介氏）

第3巻『浄土 大いなる場のはたらき』（281頁）

（序文：帯津三敬病院名誉院長 帯津良一氏）

価 格

各巻共に1冊2,600円

（送料・税別）

問い合わせと申し込み

樹心社

TEL 042-577-2778

FAX 042-577-2758



現代と親鸞の研究会・第26回

「世俗の尊さ」と「宗教的理想」

フォトジャーナリスト 藤田 庄 市



藤田庄市 氏

2007年5月15日、アルカディア市ケ谷（千代田区）において、フォトジャーナリストの藤田庄市氏をお迎えして、「現代と親鸞の研究会」を開催した。「世俗」をどう回復するかという視点から、宗教現象の事実をジャーナリズムに乗せて取り組まれている藤田氏に、「世俗の尊さ」と「宗教的理想」について語っていただいた。ここにその一部を紹介する。

（囑託研究員 本多雅人）

■ なぜ「世俗」を問題にするのか ——オウム法廷より考える——

いまの日本の中で、宗教あるいは宗教現象、超越的存在の軽さというものが、悪い方向に深まり、広がってきています。それは同時に、世俗の意味も非常に軽く考えるという状況だと思っています。

「聖と俗」と言ったときに、無意識のうちに何となく聖のほうが上のような、尊いようなことを前提としていないか、と私は感じます。はたしてそれは正しいのか、きちんと現実を反映しているのか、まずそこからの懷疑を常にもっていないかとは思っています。ここで言う「俗」、つまり「世俗」とは、金儲けとか、社会的地位を高めたいとかというのではありません。毎日を大事に^つ慎まじやかに生きること、因果関係に超自然的な存在をもち込まないで考えることが、ここで言う世俗の意味です。

世俗の意味をあらためて感じたのは、オウム法廷の取材で、裁判の傍聴をしているときでした。遺族の調書と証言で感じたのは、オウムの

犠牲になった方々がいかに日々を懸命に生きていたか、ということでした。それはまさに世俗に生きる者の姿そのものでした。また、1989年の一家殺害事件の坂本堤弁護士の義父がおっしゃっていたのですが、「犯人たちの年齢が自分たちの子どもと同年代であることを考えると、あの集団（オウム）は許せないが、そのように育てたのは自分たちの世代だ。そういう日本を創ってしまった自分たちの間違いをはっきりさせなければならない」と。

被害者が、犯人への恨みを超えて、深い反省をしているのです。これは、別に宗教の論理をもち出してきているわけではないのです。私は、オウムの取材をとおして、世俗に生きる方々とお会いし、感動しました。

これに対して、次に「聖」の問題について述べてみたいと思います。麻原彰晃は、坂本弁護士を殺した早川紀代秀に、「聖なる道は、善悪を超えている。お前は善悪の観念が強いからそれを捨てなければならない。人間的な情も執着になるから捨てろ」と言っています。麻原は、「聖」が「俗」より高みにあると思い込んでいるから、そういうことを平気で言うのでしょう。麻原は、宗教レトリックを取り入れて、似たようなことをいくらでも言っています。

それが、オウムの宗教システムのなかに用いられたときにどうなるのかと言えば、早川の場合、坂本さんを殺すときの状況について、「子どもを含めて家族をポア（殺す）すること^{ちゅうちよ}に躊躇はあったが、本当の慈悲はグル（尊師）にしかない。『ポアしろ』と言われれば、慈悲のないわれわれは反抗できない。やりたくないのは、自分が汚れた気持ちだからだと思ってし

まう」と答えているのです。

新実智光に至ってはもっと凄まじいです。オウムがあゝの罪を犯した根本的な動機というのは、衆生救済なのです。新実が、教団のリンチ殺害事件のところで、「魔境に入って、徳を減らして低い世界に墮ちるより、高い世界へ転生したほうが幸せになるからポアした。そうした麻原の思し召しが正しい選択と考えた」と、迷いや疑いもなく平然と言うわけです。ここでもポアの論理が用いられるのですが、そこをしっかりと見ないとオウムの修行というのはわからないし、今後の教訓として生かせないと思います。

もう少し宗教一般に普遍化すると、現実の生活から離れた宗教レトリックというものは、特に宗教者あるいは宗教リーダーが、信徒とか弟子に向かって言うときに、いかに空しく危険になるかということの一つの表れなのです。極端な事例をもち出しているように見えますけれど、極端ではなくむしろ極めて典型的だろうと思うのです。言葉としては論理も強さもないけれど、暮らしている人びとの日々の尊さに比べ、オウムの連中の発言は実に浅薄だと思います。

いずれにしても、「聖」と「俗」を考えたときに、はたして聖のほうが尊いのかどうか、根本的な疑問としてもたなくてはならないと思います。また、宗教レトリック、宗教的理想が本当に光を発するにはどのような条件が必要なのかを考えていかなければならないと思います。

■ 親鸞の凄み

実は、私自身が「世俗の尊さ」に気づかされた原点は親鸞さんだったのです。16歳のときに『歎異抄入門』（現代教養文庫）を読んで、親鸞に眼を開かれたのです。この中で、私が感動したのが『無量寿経』です。「たとい我、仏を得んに、十方衆生、心を至し信樂して我が国に生まれんと欲うて、乃至十念せん。もし生まれずは、正覚を取らじ」（第18願）という本願の思想について、その後、さらに金子大榮や曾我量深の本を読んで、娑婆の存在について考えさせられました。要するに、世の中の人びとが救われなければ自分も救われないのだという、

そういう考え方があるわけです。その考え方は私には説得力があり、いつの間にか私に染み付いていました。

また、私は親鸞さんの誦った「五十六億七千万 弥勒菩薩はとしをへん まことの信心うるひとは このたびさとりをひらくべし」という「正像末和讃」も大好きです。「まことの信心を得る」「この世でさとりを開くべし」という場は娑婆でしょう。これは、世俗と言いますか、この世というものを強烈に意識しているわけです。親鸞さんには、「非僧非俗」というところに行き着いた凄みがあると思っています。

また、『鈴木大拙選集』（春秋社）の「妙好人」（第6巻）を読んだことがあります。妙好人は、それこそ日々の生活の中で、信心をまさに蓮の華の如く美しく生きていくわけです。私も「妙好人」を読んだ当時は、随分安心したといえますか、教えられました。これが世俗というものに気づいていくことの、私の中にあるルーツの一つだろうと思っています。

（文責：親鸞仏教センター）

※藤田庄市氏の問題提起と質疑は、『現代と親鸞』第16号（2008年12月1日号）に掲載予定です。

藤田 庄市（ふじた しょういち）フォトジャーナリスト
1947年、東京都に生まれる。71年、大正大学文学部哲学科卒業。宗教学専攻。通信社に勤務の後、80年、フリーランスとして活動を始める。日本各地のさまざまな山岳信仰、民俗芸能等を取材する一方、オウム真理教など現代のカルト問題、宗教全般についての幅広い取材・執筆活動を行っている。著書に『民俗仏教の旅』（青弓社）、『オウム真理教事件』（朝日新聞社）、『行とは何か』（新潮社）など多数。また『新宗教事典』（弘文堂）、『仏教行事歳時記』（第一法規）などのグラビアを担当。



「現代と親鸞の研究会」（千代田区の「アルカディア市ヶ谷」で）

③「自力」は、すぐれたることをぬきいだし、あつむることばなり。このゆえに「唯信鈔」というなり。また「唯信」はこれ、この他力の信心のほかに余のことならわずとなり。すなわち本弘誓願なるがゆえなればなり。

(原文は、東本願寺発行の『真宗聖典』五四七頁)

語 註

①「真実」「浄土和讃」には、左訓として、「真実」に「シントイフハ イツハリヘツラハヌラシントイフ シチトイフハ カナラスモノ、ミトナルライフナリ」とある。「モノ、ミトナル」とは、人間の内実となるということ。

②「他力」親鸞は、他力について「他力」と言うは、如来の本願力なり(『教行信証』『行巻』『真宗聖典』一九三頁)と述べている。

③「自力」親鸞は、自力について「自力」というは、わがみをしたのみ、わがところをたのむ、わがちからをばげみ、わがさまさまの善根をたのむひとなり(『一念多念文意』『真宗聖典』五四一頁)と述べている。

試訳をめぐって

「原文」「本願他力をたのみて自力をはなれたる」

「現代語訳」「阿弥陀如来の本願のはたらきをこの身にいただいて、有限な自分であるにもかかわらず、その努力で何でもなし得ると思うところを離れたあり方」

「仮」は「真ではない」ということである。阿弥陀如来の本願のはたらきをこの身にいただいて、有限な自分であるにもかかわらず、その努力で何でもなし得ると思うところを離れたあり方、これを「唯信」というのである。

「鈔」というのは、すぐれた言葉を選びとって集めるという意味の語である。それで「唯信鈔」という。また「唯信」とは、無限大悲に育てられ目覚めたこの他力の信心を生活の依りどころとして、その他のことを依りどころとしないということである。それは、この他力の信心をもって、生きとし生けるものすべてを救いとうと誓うのが、阿弥陀如来の本願だからである。

(訳・語註：親鸞仏教センター)

「本願他力をたのみて自力をはなれたる」。この現代語訳を検討するなかで、「世界は自分の範囲内だ、という自意識がひっくりかえる」ということが語り合われた。自分の力をどこまでも有効だと執着するところ、それを自力と言う。大きな困難のはたらきの中にあることを見失い、自己責任という言葉が堂々とまかり通る「現代」。それは、自力全盛の時代なのかもしれない。

「本願他力」を「たのみ」という一語こそ、「唯信」の内実である。それをいかに現代語訳へと盛り込んでいくか。単に依存するのでもなく、一心不乱に努力するのでもない、「いま」というニュアンス、「自覚」という意味も込めて、「阿弥陀如来の本願のはたらきをこの身にいただいて」と試訳をつけた。

añjali



現代と親鸞

第25号

現代と親鸞

第25号

現代と親鸞

第25号

現代と親鸞

第25号

- 理解：日本倫理学会第58回学術大会・新潟大学
- 11・1 第11回(通算・第62回)連続講座「親鸞思想の解明」(東京国際フォーラム)
- 11・6 第33回現代と親鸞の研究会「日本のことば遣いに見られる仏教思想の影響」(英語と日本語で見ていくもの)日本女子大学教授・井出祥子氏(千代田区・アルカディア市ヶ谷)
- 11・9 親鸞聖人ご命日のつどい
- 11・10 本多所長の講演録「浄土 大いなる場のはたらき」(全三巻の3、序文・帯津良一氏)が刊行
- 11・16 第5回テーマ別研究交流会「人間と社会の未来」社会学者・見田宗介氏(文京区・フォレスト本郷)
- 11・20 現代の諸問題に学ぶ研究会「心身問題と神経生物学」サールの生物学的自然主義から「東京工業大学大学院准教授・三宅美博氏(アルカディア市ヶ谷)
- 11・28 第3回研究員と読む公開輪読会「いま新たに聞く『根尊の世界』(スワタニヒタ)を読む」①11/28 ②12/5 ③12/12 ④12/19(文京区・東京大学仏教会館)
- 12・1 第14号(写真上)、「現代と親鸞」第13号(写真中)、「親鸞仏教センター通信」第24号を発行
- 12・14 親鸞聖人ご命日のつどい
- 12・14 公開講演会2007「テーマ：いのちの不思議さ―科学と宗教の生命観。『生きていく』とはどういうことか―科学的生命論より」NPO法人「場の研究所」所長・清水博氏、「大悲の中に独り生きる」親鸞に学ぶ生命観」本多弘之所長(東京国際フォーラム)
- 12・26 親鸞仏教センター報恩講
- 2008年
- 1・9 第3回研究員と読む公開輪読会「いま新たに聞く『清沢澗之の世界』(宗教哲学叢書)を読む」①1/9 ②1/16 ③1/23 ④1/30(東京大学仏教会館)
- 1・11 親鸞聖人ご命日のつどい
- 1・11 第34回現代と親鸞の研究会「善悪を超える―人間回復への試み」津田塾大学准教授・坂上香氏(アルカディア市ヶ谷)
- 1・25 第10回英訳「教行信証」再版編集会議
- 1・22 第12回(通算・第63回)連続講座「親鸞思想の解明」(東京国際フォーラム)
- 1・25 第6回テーマ別研究交流会「現代人の孤独」哲学者・内山節氏(東京ガールデンパレス)
- 2・1 人事発令(ニューヨーク州立大学准教授のマーク・L・ブラム氏が客員研究員に発令)
- 2・2 親鸞聖人ご命日のつどい
- 2・20 第13回(通算・第64回)連続講座「親鸞思想の解明」(東京国際フォーラム)
- 3・1 現代と親鸞第14号(写真下)、「親鸞仏教センター通信」第25号を発行。

『聖典』の試訳（現代語化）

「『聖典の試訳』（現代語化）」研究会では、『歎異抄』に続き、親鸞聖人が晩年に著した『唯信鈔文意』に取り組んでいる。『唯信鈔』は、同じ法然上人門下の先輩である聖覚の著である。生涯の師、法然の教えをそのままに伝えるこの書を、親鸞は非常に大切にされた。その『唯信鈔』に引用されている経釈の要文を取り上げ、注釈を加えたものが、『唯信鈔文意』である。

奥書によれば、『唯信鈔文意』は「文字のこころもならず、あさましき愚痴きわまりなき」ひとびと、すなわち「いなかのひとびと」に向けて著された書である。現代に照らしてみるとき、この「文字のこころもならず、あさましき愚痴きわまりなき」人びとは、いったい誰を指すのだろうか。その「いなかのひとびと」が、『唯信鈔文意』においては「われら」と語られ、親鸞自身と同一視されている。

親鸞は語りかける。その言葉に、まずは「ひとり」耳を澄ましてみたい。

（なお、現代語化に際しては、重ねられた議論とその臨場感を少しでも伝えたいという願いから、試訳にあたって特に焦点となった原文の一部を抜粋し、「試訳をめぐって」として併記していきたい）

（囑託研究員 法隆誠幸）

『唯信鈔文意』試訳①

原文

「唯信抄」といふは、「唯」は、ただこのことひとつという。ふたつならぶことをきらうことばなり。また「唯」は、ひとりというこころなり。「信」は、うたがいないきこころなり。すなわちこれ真実の信心なり。虚仮はなれたるこころなり。

「虚」は、むなしという。「仮」は、かりなるといふことなり。「虚」は、実ならぬをいう。「仮」は、真ならぬをいうなり。本願他力をた

現代語訳

『唯信鈔』の「唯」は、「ただこのことひとつ」をいう。二つ並ぶことをきらう言葉である。また「唯」は、「ひとり」という意である。「信」は、疑いのない心である。すなわち、真実の信心である。虚仮を離れた心である。

「虚」は「むなし」ということ、「仮」は「かりである」ということである。「虚」は「実ではない」ということ、

親鸞仏教センターの動き
(2007・6・2008・2) 抄出

■2007年

6・1 情報誌「浄土」第13号、研究誌「現代と親鸞」第22号、機関紙「親鸞仏教センター通信」第22号を発行。

6・5 第22回研究協議（研究・交流・出版等の協議と企画）以降、定期的に会議を開催。

6・8 第7回（通算・第58回）連続講座「親鸞思想の解明」千代田区・東京国際フォーラム

6・13 第8回英訳「教行信証」再版編集会議

6・28 第87回英訳「教行信証」研究員・鈴木大拙訳「教行信証」の特設及びその意義、ニューヨーク州立大学准教授・マーク・L・ブルーム氏（文京区・東京ガーデンパルク）

6・29 伊東恵深氏（前研究員・大谷大学非常勤講師）に真宗大谷派振興が授与される。論議「他力門仏教の再構築―清沢満之・他力門哲学教習試稿」の思想的意義。

7・1 第58回清沢満之研究会

7・13 人事発令（前田専学客員研究員・天野真知子囑託・中津功非常勤囑託が再任）

7・17 第12回「唯信鈔文意」研究会

8・1 第8回（通算・第59回）連続講座「親鸞思想の解明」（東京国際フォーラム）

8・10 人事発令（本多雅人、越部良一、常塚晴、法隆誠幸、春近敬が囑託研究員として再任）

8・27 第32回現代と親鸞の研究員「現代人の生命観とスピリチュアリティ」大正大学教養部・弓山達也氏（千代田区・アルカディア市ヶ谷）

9・1 第9回（通算・第60回）連続講座「親鸞思想の解明」（東京国際フォーラム）

9・8 第9回英訳「教行信証」再版編集会議

9・14 親鸞聖人ご命日のついで

9・17 学会発表（春近敬囑託研究員「独訳「正信念仏偈」にみる東洋観」・日本宗教学会第66回学術大会・立正大学大崎キャンパス）

10・2 第10回（通算・第61回）連続講座「親鸞思想の解明」（東京国際フォーラム）

10・3 本多所長の講演録「浄土」その響きと言葉（全三巻の2、序文・清沢俊氏）が刊行。

10・12 親鸞聖人ご命日のついで

10・13 学会発表（山本伸裕研究員「清沢満之の他者

テーマ別研究交流会報告④

—孤独・孤立を乗り越えるために—

生命的根拠に基づく人間観の構築を願って

親鸞仏教センター研究員 高 海 史

「テーマ別研究交流会」では、講師と親鸞仏教センター研究員が現代に生起するさまざまな課題や問題を共有しつつ、対話を重ね、交流していくことを目的としている。

今年度（2007年度）は、テーマに「現代社会における孤独」を掲げ、2007年4月20日には文京区の東京ガーデンパレスにおいて、哲学者の花崎皋平氏を講師にお迎えし、「ピープルネス（民衆性）・サブシステム（生命性）・スピリチュアリティ（霊性）」の講題のもとに、研究交流会を開催した。

本号では、氏の問題提起（要旨）を紹介しながら、応答内容の一部を報告する。

■「ピープルネス・サブシステム・スピリチュアリティ」とは

まず花崎氏は、「ピープルネス（民衆性）」は、造語であり、特定の階級や階層、立場、主体を指すのではなく、ある価値理念をあらわす哲学的な概念であるとしたうえで、その言葉に込められた意味を、次のように提示された。

核になる第一の考え方は、人間の根源的な平等です。全共闘運動の時に、雑誌『朝日ジャーナル』で、東大全共闘議長^{（注）}の山本義隆と九州大学の哲学教授の滝沢克己が往復書簡を交わしています。その時に山本が「ただの人」として物理学徒を志すと言ったことに対し、滝沢は、「人間共通の低みに立つ」と答えました。この考え方は、これは私が申し上げるまでもなく、「いし・かわら・つぶてのごとくなるわれらなり」（『唯信鈔文意』）という親鸞の考え方とながっているような気がします。

第二は、ピープルになることが大事な目標だからです。積極的、能動的にピープルになるということに思想的な意味づけをし



花崎 皋平（はなざき こうへい） 哲学者
1931年、東京都に生まれる。東京大学文学部哲学科卒業。北海道大学助教授を経て、ベトナム反戦運動、成田空港や伊達火力発電所などの地域住民運動、アイヌ民族の復権運動への支援連帯運動に参加。現在、さっぽろ自由学校「遊」、ピープルズ・プラン研究所の運営委員。著書に、『生きる場の哲学—共感からの出発』『個人／個人を超えるもの』（以上、岩波書店）、『対話』（東本願寺出版部）など多数。

たいと考えています。

第三は、いまの支配的な思想、特に、グローバル化の潮流は、有能であるとか、頭がいいとかを重要視しますが、それはたいしたことではないと考えたいからです。『瓢々亭通信』^{（注）}発行人の思想家、前田俊彦さんは「脳味噌には人によって上等、下等があることは避けられないが、しかし、たかが味噌の問題である。いくら上等だといっても程度はしれている。しかし、ハートはちがう。万人においてハートは平等に同一である」と述べています。そういう押さえ方をしないと、いまの潮流には負けてしまうように思います。

と三つの点で語られた。

次に、「サブシステム（生命性）」とは、生

存し続けることであり、この言葉に最も近い日本語として、沖縄・金武湾の石油備蓄基地建設反対運動の中心であった安里清信氏の「生存基盤に根を張る」という言葉をあげられた。それに関して「所有」に対する批判の意味を、経済と環境の観点から次のように述べられた。

多くの経済学者が言っていることですが、21世紀のそう遠くない時期に、水、食糧、エネルギー資源がどんどん減少していくのに対して、人口が増加し、消費を賄えなくなる時期が予測されています。いまの新自由主義経済の考え方から言うと、それはできるだけ早く力づくで自分たちのものにしておこうとするわけですから、その考え方でいけば、ますます大量無差別殺戮という可能性が増大する、と言わなければなりません。全体資源が稀少になったときに、力に頼って奪い合うのではなくて、できるだけ平等に分ち合う考え方とそのシステムを、はたして人類はそう長くない未来に獲得できるのだろうか。これは深刻な問いです。

理想論になりますが、原則的なこととしては、無所有、共有、いりあい、コモンズ、そういうものをどうやって回復するかが問題になってくると思います。

そして、「スピリチュアリティ（霊性）」については、ピープルネスとサブシステムを支える価値理念であると位置づけられ、

世界宗教が説くスピリチュアリティは、それぞれ教義によって違いますが、共通するものがあるのではないのでしょうか。特定の宗教を信仰するのとは別に、人間のうちには有限に対して無限、時間に対して永遠、日常卑俗に対して美や崇高を感じ取る感性があります。そして、さらにそれをじっと考える思索のはたらきがあり、それを目覚めさせて活性化させることが人間の本来の使命の一部ではないのでしょうか。人間の本来性と結び付くようなかたちでのス

ピリチュアリティというものを考えたいと思います。

と述べられた。

そのようなスピリチュアリティを花崎氏は、前田俊彦氏の著書『百姓は米をつくらず田をつくる』から、「人間の尊厳という場合、人間には〈人間の罪〉の意識があるということを除いてはその根拠はないのです。それあるがゆえに人間は、自由と平等を主張することができ、平和への希望ももてるというべきです。あるいは、いわゆる価値観の多様性も、〈人間の罪〉についての〈共感〉があって初めて秩序が保たれるでありましょう。してみれば、〈人間の罪〉意識こそが根源的統一原理であります」（取意）という言葉を紹介され、罪の意識との関連を示唆された。

■ 現代社会における孤独

最後に、「現代社会における孤独」について花崎氏は、

西欧の近代は、個人を主体とする思想を開き出した。そして独自性、他者からの差異性を強調します。けれども、日本も含めてアジアにおける、特に民衆思想の立場から私は、個人を「上半身は個であっても下半身は生命の海、類としての生命のつながりに浸されている」というイメージで捉えたいと思います。自由平等な唯一的個人を、その生命的根拠から切り離さない思想が必要だと考えます。

との観点を示された。

花崎氏の紡ぎ出す言葉には、大地に根ざした力強さが感じられ、社会の現実に対して目を開かせる方向性をもっているように思う。今後、現代人の孤独というテーマを考えるうえでも、大変大きな示唆をいただいた研究交流会であった。

※花崎皋平氏の問題提起と質疑は、『現代と親鸞』第15号（2008年6月1日号）に掲載予定です。

● 清沢満之研究会報告 ⑥ ●

「有限無限録」を読む

親鸞仏教センター研究員 山 本 伸 裕



清沢満之研究会では、前研究員（伊東恵深・現大谷大学非常勤講師）のもと、2007年3月に「他力門哲学骸骨試稿」を読了し、同年5月より新たに「有限無限録」をテキストに、鋭意、清沢満之の思想の現代的意味の解明に取り組んでいる。

今号では、その一端を紹介し、第1回（通算6回）報告とする（出典は『清沢満之全集』〈岩波書店〉とし、以下、巻数と頁数を記す）。



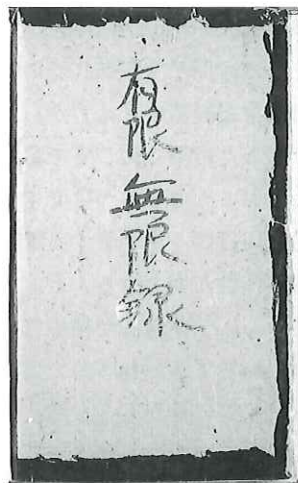
■ 「有限無限録」の位置づけ

当研究会では、これまで『宗教哲学骸骨』（1892年）、「他力門哲学骸骨試稿」（1895年）と、前期のいわゆる骸骨時代の著作を中心に学んできた。「有限無限録」は、満之晩年の「精神主義」の思想が展開されていく、転換期にあたる時期に著された作品である。

精神主義ということばの初出は、1901年に発刊された雑誌『精神界』においてであるが、ここにわれわれは、満之の思想がやがて精神主義と呼ばれるものへと結実していく道筋をはっきりと確認することができる。その意味でも、「有限無限録」は清沢満之の生涯の一貫した思想をつかむには格好のテキストであると言えよう。

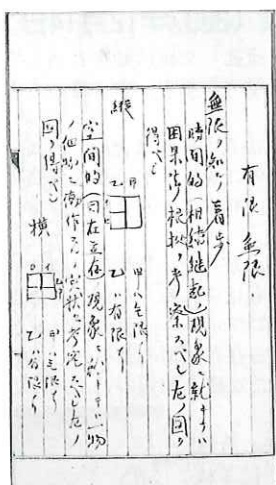
■ 執筆の背景

「有限無限録」は、当時の新法主（門首後継者）・大谷光演師が、首都・東京における道徳の墮落を目の当たりにして慨嘆された気持ちに応答するかたちで、明治32年（1899年）6月より、順次、執筆が開始されたものである。この



「有限無限録」（原表紙見返し）
清沢満之記念館 収蔵

2ヵ月前に脱稿した「^{ろうせんき}臘扇記」が、「自己自身の安心の確立を眼目」としているのに対して、「有限無限録」では「社会道徳の復興に主眼がそそがれている」と、西村見暁氏が指摘しているように（『清沢満之先生』法蔵館）、「有限無限録」には、仏教用語のみならず、当時の日本社会で道徳が語られる際に広く一般に普及していた儒教用語、例えば仁・義・礼・智・信などが、数多く使用されているところにひとつの特色が認められる。仏教（他力門）の信仰に、満之が足場を据えていることは言うまでもない。しかしながら、その視野は決して仏教という宗教思想の範囲だけにとどまるものではなかった。宗教と倫理・道徳とのあるべきあり方が、明治という新しい時代状況のなかで積極的に問い直されていくためにも、仏教思想という枠組みを超えた問いかけを広く行うことの必要性を満之は感じていたものと推察されるのである。



「有限無限録」
清澤満之記念館 収蔵

■「公」について考える

明治24年度の真宗大学寮における宗教哲学の講義のなかで、満之は「有限」と「無限」との関係、哲学上の最難問であると述べている。この難問こそ、まさしく彼が「宗教」「道徳」の関係として生涯追い続けたテーマでもあったと言える。

われわれが宗教について深く考えるとき、つねに問題になってくるのが、無限（＝絶対存在としての神仏）と有限（＝相対存在としての私たち）との関係である。もし宗教の本質的構造が、満之が言うように「有限と無限との調和」に認められるとすれば、有限存在たる人間にとっての宗教的救いを、有限性を消し去って無限との合一が果たされることだと、そう簡単には言えないはずである。というのも、「無限」とは、「我」と「彼」を含めたすべての有限存在の無数の総体として考えられるものであるのに対し、その「無限」の觀念に向き合う「我」も「彼」も、実際、「有限」な存在にほかならないからである。したがって、「有限」な存在でしかないわれわれが、彼我を包む「公」、すなわち「無限」なるものに、一人ひとり向き合って生きていくことが、現実のわれわれにとってはむしろ大事なのであり、そこにこそ「宗教」の実際上の意味と効用が認められるのでなければならないであろう。

このことは、要するに自己（我）と他者（彼）の関係、ひいては私と彼を包む場（公）としての社会のあり方について考える立場に、われわれがたえず立ち返る必要があるということの意味している。

■ 宗教的根基の確立

「有限無限録」〔四〕忠信孝悌）では、儒教に説かれる〈仁〉〈義〉の概念によって、「有限」「無限」の関係が次のように語られている。

仁ハ対他的ナリ

義ハ対自的ナリ

仁ノ弊ヤ妄動ニ陥ル之ヲ匡正スルハ義ナリ

義ノ弊ヤ隠退ニ陥ル之ヲ救正スルハ仁ナリ

仁義相助ケテ正鵠ヲ誤ラサラシム

(2-104)

明治32年11月から12月にかけて発表された「宗教と道徳との相関」と題する論文のなかで、満之は、宗教と倫理の関係について「吾人は吾人の存立を完成せんが為には、必ず他人に対して倫理道徳を厳守せざるべからず、他人に対して倫理道徳を厳守せんには、吾人は必ずや宗教的根基に立たざるべからざるに至るなり」（6-233）と述べている。

このことばかりしても、「有限無限録」で言われるところの対他的〈仁〉のもたらすものが、有限界における道徳的視点であるのに対し、〈義〉における対自的視点に見据えられるのは無限なるもので、これが宗教的視点に相当することは明らかであろう。

道徳を「真正の道徳」たらしめるには、宗教的視点が絶対に欠かせないというのが、満之の基本的見解であった。宗教的視点を獲得することとは、同時に倫理的視点を獲得することではなければならない。どちらか一方だけでは、不十分であり、両方が相俟つこと^{あいま}で、はじめて「正鵠ヲ誤ラサラシム」ことが可能になるというのである。ここにわれわれは、当時の道徳のあり方のみならず、宗教のあり方に対してもラディカルな批判を行う満之の姿勢を見てとることができるであろう。

■ 新企画「親鸞仏教センター公開講演会2007」を開催 (2007年12月14日)

2007年度、新たに企画した「親鸞仏教センター公開講演会」は、これまで研究・交流活動をとおりて対話を重ねてきた「現代」の問題を、親鸞聖人の教えとの接点から考えようと、大谷大学(京都市)の後援のもと、その第1回は12月14日、東京国際フォーラム(有楽町)のホールD5で開催した。

「いのちの不思議さ—科学と宗教の生命観」をテーマに、清水博氏(NPO法人「場の研究所」所長・東京大学名誉教授)の「生きていくとはどういうことか—科学的生命論より」と題してのご講演と本多弘之所長の「大悲の中に独り生きる—親鸞に学ぶ生命観」と題する講演の後、質疑応答がなされた。有識者やサラリーマン、学生など約160名の参加者で、3時間半にわたる熱気に満ちた集いとなった。

講演のなかで、清水氏(=写真上)は、「これまでの科学を『近代科学』と呼ぶが、その特徴は、研究の対象を自分から細かく分離していく方向をもっている。それはまた、生命科学の分野でも見られる。だが、生命に深く出会うには、いままでのモノ(物)の科学からコト(現象)の科学へ、『モノとしてのいのち』から『コトとしてのいのち』として捉える思想の展開があり、それが『場』の思想である。人間にある存在感情の共感としての『場』の思想こそ、科学と宗教がお互いの特徴を生かしながら出会うのであり、新たな統合的知の生まれんことを願っている」と語られた。

続いて、本多所長からは『『モノとしてのいのち』から、『コトとしてのいのち』を感じながら、生命の場が未来から開かれてくるという考え方は、親鸞聖人の顕かにされた浄土の教えと、清水先生が提起されている『場』の思想の呼応する点ではないか』と述べ、孤独な身を生きる人間に、死後ではなく、いまはたらきかけてやまない浄土のはたらきが、「一人の独立者」としての主体的な人間を生みだしていく仏法の意味を語った。

続いての質疑応答(=写真下)では、主に「場」についての質問が寄せられ、清水氏は「親鸞の教えは、『場の宗教』と言えるのではないかと。また、日本文化は『場の文化』である」と、場の思想と宗教の接点について言及された。

親鸞仏教センターでは、今後、年1回の公開講演会を継続し、現代に生きる人間の宗教的要求との接点を大切な問いとしながら、親鸞聖人の思想、信念を表現していきたいと考えている。

※「公開講演会2007」の講演記録は、『現代と親鸞』第16号(2008年12月1日号)に掲載予定です。



■ 研究員と読む「公開輪読会」(3月)のお知らせ

■ 法然——念仏ひとつ(全4回)

テーマ:『選択本願念仏集』を読む

日時:2008年3月5日、12日、19日、26日
いずれも午後6時30分～8時30分

担当:高 海史研究員

会場:東京大学仏教会館2階ホール

定員:35名 資料代:500円(4回分)

■ 申し込みと問い合わせ

公開輪読会 T係

〒113-0023 東京都文京区向丘1-13-7

TEL 03-3814-4900・FAX 03-3814-4901

E-mail shinran-bc@tomo-net.or.jp



東京メトロ丸の内線「本郷三丁目」駅徒歩3分
都営大江戸線「本郷三丁目」駅徒歩1分

「アンジャリの会」入会者募集中!

『anjali』(合掌の意味・年2回発行)の個人購読を受け付けています。

◆年会費 1,000円(送料込)

◆申し込みと問い合わせ

〒113-0023 東京都文京区向丘1-13-7

親鸞仏教センター内「アンジャリの会」T係

TEL 03-3814-4900

FAX 03-3814-4901

E-mail shinran-bc@tomo-net.or.jp

あ と が き

親鸞聖人が著された『唯信鈔文意』を取り上げ、その試訳の連載(6~7頁)が始まった。この事業を進めている『聖典』の試訳研究会では、「宗教語の現代語への意識自体の限界性」と「試訳を共同作業で行うことの難しさ」に直面しながら、苦闘している。本紙では、原文・現代語訳・語註のほか、焦点・議論となった箇所を一つ取り上げ、「試訳をめぐって」と題して原文から現代語訳が紡ぎ出されるまでの場面を紹介したい。親鸞聖人の言葉に、生きることの意味を尋ねる作業のひとつでもある▼昨秋から1月末まで、東京・上野の「国立科学博物館」で「大ロボット博」が開かれた。いまや世界中の産業ロボットの約半数を生産・設置している日本は、世界が認めるロボット大国である。会場には、ロボットの源流ともいえる「からくり」から、生産現場や介護・医療支援、また天災・人災現場などで活躍するロボット、さらには、「暮らしの未来」をテーマに人間とのコミュニケーションを創造する人工知能や目を持った家庭用の最新ロボットまで、開発事業の現状が紹介されていた。しかも、日々進化するロボット技術の背景には、人と技術、人と自然、人と地球の共

生など、人が「生きていくこと」と無関係なものなど何ひとつないくらい、現代生活の隅々にまで科学の力が浸透していることが見てとれる▼ロボットと言えば、1952(昭和27)年から17年間、雑誌に連載された「鉄腕アトム」は、幼い頃の僕たちに多くの夢を与えてくれたことを思い出す。後に、手塚治虫さんは『ガラスの地球を救え』(1989年)において、このように述べている。「ぼくの代表作と言われる『鉄腕アトム』が、未来の世界は技術革新によって繁栄し、幸福を生むというビジョンを掲げているように思われているが、『アトム』は、そんなテーマで描いたわけではありません。自然や人間性を置き忘れて、ひたすら進歩のみをめざして突っ走る科学技術が、どんなに深い亀裂や歪みを社会にもたらし、差別を生み、人間や生命あるものを無残に傷つけてゆくかを描いたつもりです」(手塚眞「なぜ『鉄腕アトム』は生まれたか—アトムの背後にあるもの」)と▼あらためて「公開講演会2007」でお話くださった清水博先生の言葉をかみしめたい。人が「生きていくこと」のまえに「生きてあること」を問う、このことが科学と宗教の対話の根底にあることを。(長谷岡)